

No326 2025年1月

丸子中央病院 薬局



「認知症」とは、様々な脳の病気により、脳の神経細胞の働きが徐々に低下し、認知機能（記憶、判断力など）が低下して、社会生活に支障をきたした状態をいいます。

我が国では高齢化の進展とともに、認知症の人も増加しています。65歳以上の高齢者では、2012年度の時点で7人に1人程度とされ、年齢を重ねるほど発症する可能性が高まり、今後も認知症の人は増え続けると予想されています。なお、認知症の前段階と考えられている軽度認知障害（MCI）の人も加えると4人に1人の割合となりますが、MCIの方が全て認知症になるわけではありません。



	加齢によるもの忘れ	認知症によるもの忘れ
体験したこと	一部を忘れる 例) 朝ごはんのメニュー	全てを忘れている 例) 朝ごはんを食べたこと自体
もの忘れの自覚	ある	ない（初期には自覚があることが少ない）
日常生活への支障	ない	ある
症状の進行	極めて徐々にしか進行しない	進行する

アルツハイマー型認知症とは・・・

認知症の原因としては最も多いといわれており、長い年月をかけて脳に、アミロイドβ、リン酸化タウというタンパク質がたまり認知症をきたすと考えられています。記憶障害（もの忘れ）から始まることが多いですが、失語（音として聞こえていても話がわかりにくい、物の名前がわからないなど）や、失認（視力は問題ないのに、目で見えた情報を形として把握し難い）、失行（手足の動きは問題ないのに、今までできていた動作を行えない）などが目立つこともあります。

○**中核症状**：脳の障害により直接起こる症状。必ずみられる。

記憶障害・見当識障害・失語・失行・失認・遂行機能障害など

○**周辺症状 (BPSD)** : 病気の進行に伴って現れる異常行動や精神症状・個人差が大きく、環境にも影響される。中核症状に付随して引き起こされるに二次的な症状。



中核症状よりも患者や家族の悩み・負担の原因となる場合が多いが、適切な治療や対応で症状の改善が期待できる。

陽性症状→焦燥・興奮・暴力・徘徊など

陰性症状→幻覚・妄想・抑うつ・不安・不眠など



アルツハイマー型認知症薬

薬物療法としてはおおきく2つに分類されます。

これらの薬はアルツハイマー型認知症における認知症症状の進行抑制に使用されます。

副作用発現抑制のため少量より開始し、徐々に増量していきます。開始時や、増量時は特に注意が必要です。

○コリンエステラーゼ阻害薬

作用：神経細胞の脱落に伴って生じるも脳内のアセチルコリンの減少を補う

一般名：ドネペジル・ガランタミン・リバスチグミン

剤形：錠剤・口腔内崩壊錠・ゼリー・貼付剤

主な副作用：消化器症状、皮膚症状（貼付剤）など

○MND 受容体拮抗薬

作用：脳内神経伝達物質であるグルタミン酸放出を抑制することで神経保護作用をもつ

一般名：メマンチン

剤形：錠剤・口腔内崩壊錠

主な副作用：めまい、頭痛など

そのほか周辺症状に対して、抗うつ薬、抗精神病薬、睡眠薬などが使用されることもあります。



認知症の治療をすることで、症状の進行を遅らせ、日常生活の支障となる症状が軽減する可能性が高まります。また、症状が抑制された場合、本人は発症後も穏やかな生活を長く送ることができ、介護する側の負担軽減にもつながります。そのため、認知症の徴候が見られた際は、なるべく早く適切な治療を受けることが大切です。